

コヒョウモンとの初めての出会いは1968年8月の上高地。小梨平キャンプ場での貸しテント利用で、自前飯盒炊さんをしたり、キャンプファイヤーを囲んだりの一夜を過ごした後、妻と明神池までの散策を楽しむ途上、樹林帯の少し開けた沢沿いに咲くヒョドリバナを訪れていた本種をネットインしたもの。当時、国立公園内では小石の位置を動かしてもいけない、という法規制があるようには聞いていたが、上高地でチョウの採集が禁止されているかどうかは知らなく、明神池近くの河原でコヒョウモンや色あせたツマジロウラジャノメ♀もネットインしている。初の本種採集個体は右図で分かるように、前翅外縁沿いに縦に並ぶ大きな黒紋が右の紋にくらべて左側で横長に大きく非対称となった変異♀である。



Aug. 12, 1968 上高地白沢
コヒョウモン ♀
(前翅黒斑点非対称)



裏面
Aug. 12, 1968 上高地白沢
leg. M. Shimazaki

その後、北海道南富良野の布礼別川林道のあちこちで多数頭が飛び交う光景に出会い、信州の



July 20, 2005
布礼別川林道

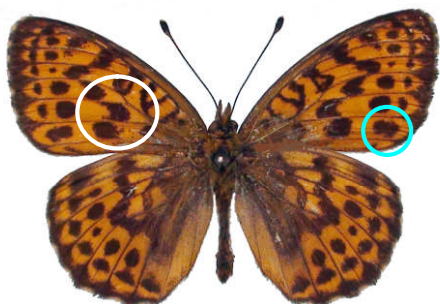


July 20, 2005
布礼別川林道

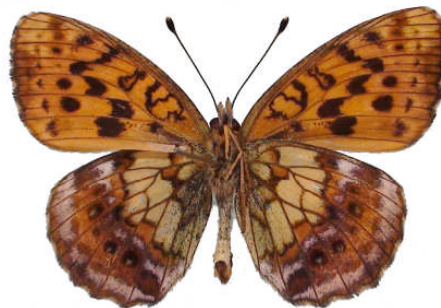
高原でもその姿を目にできたが、信州ではヒョウモンチョウと混生があつて、捕獲してから手元でじっくり観察しないかぎり、その区別は難しい。野鳥の会メンバーやチョウは写真撮影だけという人のなかには、野外観察や写真記録だけでよく無益な殺

生はすべきでないと言い切る人がいたりするが、学術的な見地からの採集による標本化は決して無益な殺生ではなく、教育的な立場からも必要なことである。学術標本としては一地域♂♀表裏で4個体あればいいわけだが、ゼフィルスなど飼育によって多数の新鮮個体を羽化させる技術が進んだために、ひとつの標本箱に同じチョウをぎっしり並べて眺めることを趣味とする愛好家がいることも事実で、自然界での無益な殺生はしないでおこう、という考えには賛同する。

いずれにしても、このコヒョウモンとヒョウモンチョウとの違いを野外観察だけで見破ることは簡単でなく、たとえ写真記録を撮ったとしても、前翅外縁がやや丸みを帯びたのがコヒョウモンで、ヒョウモンチョウでは直線的であるとか、白丸部黒紋がコヒョウモンでは楔状だがヒョウ



July 11, 2004 富良野布礼別川林道
コヒョウモン



裏面

モンチョウでは四角、水色丸部の黒紋2個がヒョウモンチョウでは分離するなどという特徴以外の差異を読み取することは難しい。両種個体を手元に準備して裏面の複雑な模様を比較すればさらに両種の微妙なちがいが：外縁沿いの青白色帯がコヒョウモン

では明瞭だがヒョウモンチョウでは不明瞭となる、などの特徴を判別できるが、その差異を判別するだけの裏面写真記録を撮ることは容易ではない。